野傾之鏡馬

西村与志作

遠13
1798

世子の四号ハ野仙と競つるといひて
西村朝義の作なり何よりてか友三
味線と改めしや思ひがゝしかの風流
友三味線とスハかゝる事目笑を頑友作
まて享保十八年の出板なり加賀の
孝助のうへをつゞりいるものゆゑこゝろび風
流友三味線をれいるなべよ世子をバ旧
号よりへきれバこそ由をつゝよしるしつ因
ス西村朝義ハ後よ西村与志とのこも
いへり西沢一風とハ異人なれバ思ひまぐふ
べからず

文化十二年
亥十月廿九日

槇志庵
主人

野仙友三味線

第一巻

目録

一 万代の蓬莱山
浅草かけて初礼者
ゆうせり宿と書れ雛

二 女さしハ神乃秘密
諸分根えのお傳
人間ハ一滴のかゝり

此本の四号ハ野傾と題るといひて
西村朝成の作なり何よりて友三
味線と改めしや思ひかくしの風流
友三味線と云ハ釣り名月笑を傾成作
まで享保十八年の出板なり加賀の
春ハのうへをつゞりたるもの也ふじ風
流友三味線を出したるまへに此本を旧
号よりつゞきしれバこそ由をさつしよむるべし因
云西村朝成ハ後に西村自志とのこも
いしハ美人なれバ思ひしまゞ、

遠 1738

野傾友三味線 巻一

第一巻

目録

一 万代の蓬莱山
浅草がけて初乱者
旬ろせり宿も重ね縁

二 女も八神ろの秘密
諸分振分のお傳
人間ハ一滴のかゝうり

待賈堂

三 男色ハ仏法の方便
三ケの津ハ柳桜
古今聖師評林

四 正月詞と呉物語
男女ハ車の両輪
嫁礼ハ人の教化

五 色欲懺悔ハ夜語
納めなる六十六ヵ所ハ女
かたらかなる鶏の

一 万代の蓬莱ハ
富十六日むの蓬莱ニ石老木
死の仙境うごかぬ鳴蓬田子の浦
流うち流り三保の松みどりを
ひて今一しかのたとあらはし
お生ハ嵐姐ゝの夢を目出度
素の御礼を引なり浅草の
親書かけて為筋ハ恵例と
十八日ハ定め刷毛ついでに
おろせの六会来がたゝ小姐様
のぞけぐ此所のお本とうろ
まうけて舅の方へ初礼に
まいらぬとおしこまりり嘘と

八百。五百万年 歳年もかく
らず。出生をあふぎさてまつる
さて、かのさとみ。相屋乃
花車とてじめ今日の物日
ホ五日ホ八日三日の詰にけ
たのミとかけまくも堂陰帯
乃神おまてむすび合せ
るの物ゆこれハ女帯の押
つけ賣。桟嬢の鼻乃向
ゆ出りけゆべい寄を四季の
よい仕義。服にさへぎる鄭塩網
かけ寄。すぐ入るまもめやうり物
輪の吸物れあへどお屋と頂

戴して五大力并もかよふ
神乃祝神と媚ゑろみを
時くかくろハ世中あけて
ゑろまでもなく懐中して
喰乃すぐら枕木町乃
何系が独息子小七といふ
鼓男連弁の様組なれど
新年の新俄ゆ入出芝
ゑぐひにゆ納め方にまて
の屠蘇白薬さべ酔さと
舌も足もさゝぎ火燵に踊り
辺盃ゆハ素永に結ぶ夕食
ハゆりとをぜと客なぐら

亭ゑのあいさつ。小七無さる
て彩八度これはでろうい碎と
見えまするといへども。弓や八まん
微塵も出酒はなぐ。出酒が拝
去と飾ぐ。拝ろくゆるしなへ
と鼾出ないひ捨て。まぐさ
見ゆるは。今戸橋金龍の
胡馬。無彩燈る。去ふ
わづかとさして。よろる。
さあしいとまごひまひしや
の茶紫とつうんでまいれ。
こゝは三谷のあびやの次ならが
二階と見えたい。僻周りゆと

手とくさてまめくは小七が
母様家まで陸分俳俄なる
生れ付は奇と守つけ面無
三寶乳遠まなられるか可惜
茶き人とと落漏して急ぎ
宿へ人と西せ。役とそて。よと
見されるるは。小七とくしも
さはりど。唐の書拍はも
酒痴とて。これも顛痛の
るいまて。ぐどもあり雲牡の
梨と調合して用ゆる
と。茶速快気いたすと
こゝはより引のけるへ

服織とぬがせ候事甚しき
ほ大汗かいて一切夏中の
ごとし。鼻紙袋の新しき
ちらし。落花粗藉なるあ
ひさき。鬢鏡ふたつ級
の櫛。罌粟頭の耳
正月三日大穀の扇風
ほ紙花。やりてのまほ同
しく。大きな木ほ同しく
禿ほ本石町のまゆ屋
饅頭五つ。楊弓屋理外
ほ長角尾張屋清六娘ほ
舞扇白きぬめの大服紗

ほ三つ嫁。これハ口ぞしつとろ
茶紫が級なり。右筆書寸
紙の快面ほ石筆まて記
なり。さてハ廿八日までの
賞つゞけれ外まで。えちら
しなると会ほ菜袋ほ
入納め。えぬ魚まて。砕の
碑なと待宵の鐘夜まれ
ほ。新八やうく正気つき
て。あられまと。あうない
いふハ。まぐ何れとも。ちらぬ
夢ほなり。依て葛鬍蕪
ざうすいまて終ほ者国と呼し

平生の新八は仕立されど
孤つきの本液に同しく河
とやとやと笑ひどその隙
日比朋友乃出なじみに見
ゆるしなへおふろさきれ
まなお河左面目なしとか
さいいひまけ。其出会に
及ばど。お宿へは其尾ふき
やうにそうしひやせば。今
宵は引かへ盃とかへて
餅これ吉野と口あひ
よく咄しかうが小七は元来女気
嫌ひまて。吉原はいふにはよ

ぞと一生女人のまゝより物を
とらぐ。お百生法利子に生る
べしとこづく誓ひを立て
じさびた坂よりくぐり役者
光春世三郎と蔓川越
新んで生うつし。京阿
床にかけて。一句当会の
本当と吾輝とるより
ひとしく。庖にてや川
初衛右に箇弁吉十郎
訳者勢至と会じ時しは
我母なりし他くさ紙に遠郷を
孝行なる思案には不和恵れ

いたり男色好の眼より見ぬ
其紫が文をもちらしたる
悪拘好と新八と論云し
されば殆碎たるうへなれば
何にても少まじきこゝは
あらねどこれぞうりは清
自分の野良せびしそ
此異なんやさなれとすでに
に男女ちきの歌の宝論より
及びけり

(二) 女色は神道の秘密

抑天の浮橋とやは男の
勝つきと名づけたり其れ

下は女浴うちとせておうん
の無だかひこれをなたら
金剛界胎蔵界れまん
ざるの阿房までも此道
にちらつざるゝ若なし。
これまたらしの細工に
あらず。又は天母は地陰陽和合
の気をうけつぐ故に蚤蚊さん
がうけるにはぐさまじといふ
極なりけりぺちんや人編に
おいて相かる何もあるなけ
也は各別ぞうへ梔粒椎をと
ありても又は知ひて落たる跡

の杭まてもあてもてんきう
ハかしまおよぐぞ。その滴かく
まりて。人間となるゝ。神
国のたゞまり。上代の様
来世まおよぶといへども。猶
ぞ仏人来りて。猶も杉子も
世界のありぬ。吏婦ハ又
偏の定めまて。わしいま
だねざめさびし。身初
屋経事云人。血気此勇
志のたゞまかたゞしけな
くも。江口神詩むろ
下の実鞆。宮詩。凡己此筑

紫の波濤上方ハ勿論雖
波の大湊津守高栖を始
め。彼ゆんま薄木泥町。鴻原
栄屋町。酒く宿くまかり此
様まあしこの別きを惜こ。
夕べくま弥来此詞とかしこ。しや
那川まさつ浜くより。芝者まて酒ハ
楯ちとひつかけし。二代男ゞ一如し
青羽町。四谷の彩宿板橋千住の
茶店。博町の裏筋八貫町。二丁立
の松ぬ来。紫ゆまき弱形。いさこまま
いさんで行ハ雅子ぞ。呼次書此拍子
木日本境の畑くべと立そいて

と源氏物語にみえたり。いせ物語
にはあてはまりひはさそおもひ
美を忘れど。生冒が清女紀氏に
なぶられしも。さくしたのちまた
にさよふが放なり。まよひは楽の
招え。さられど石佛淳川の橋に
かけて。踏でも腹をそそど。半る
の諦にかけられて。彰もおしぬぐ
そど。木佛になりていこ夜の影
に破れて足をあぶり。さらぬ
己おの耶修女雅意しと。又十
逢れくらさる。報迦は悟宇
よりおらりていましめられ

ありがたくも此神は国
乃あるじ。一女と申せハ。ずな
もち天照大神の御子なり。
此事に生れて女君とかろし
むるゆゑ。水上五十鈴
川の流れと敬。人倫にあらぬ
しるのミなりぞ。石戸令吉乃
孔子も鯉魚といふ御子息あり。
これさで居てハ出来る物にて。
ありがたい所より人生れ出て。
茶を作り飯といふ物といふでき。
大工と産んで家と建。霧雨
とふせぎ。夜露と縫く肌を

つくとこれみな女色の御新く
女君なけれハ世男なく。鍋も
茶釜も味噌もなし。金銀なる
かれば茶瓶もなし。万象乃
源好楽の開ける女数頃君
と作くへし。返答いかゝ事
をうけてのしたりけり

三 男色ハ仏法の方便

ゆゑかなりし。抑男色
大盛才一乃事と新いて
形のるゝ。天地開闢乃時ゟ。
国君立ち忽然と出ひて。
七代まで女のかたらなき

吳田和鶴ちりと同れあいて
老ほ。此若亀ほこころよせぬ
ハなし。末世ほ及ぶ中せだ
松江の鰡より里ほハ。御鰡ほ
浦しころ毒し所どのと狙
所。今の代ほうられなりき。
しかのこなるべ。三ケ丸津所舞
妓の英形様ハ名まあらはれし。
竹中彦太史香之所一学初変
伊織芙蓉ほこそ拘といふ
がごとし。中時ほ小むしさき蔵田
時ほ恵伊蔵小太史李鴻中孫
坂田小伝次これらハみな亀と

なさけのうたまりぶてび
出生あるまじき稀拘と。
むしがたりもなつかし
うりしほ。今のこやこの花
まちぐれ。市村玉柏山本
かもんら下毛之恵 独鴻
所流中村子孫 黒牡左源太
中むし署之所津川中太史
李本 室黒 見ほ世は
柳さらと鶴なりけりと
又百年以おほよそ恵し来
来記よりしや雛波のよし 沢
あやめ。浅尾十次郎 花牡

あつま鏡本辰こゞちろ
あるくにはみせもやはの函
乃ぞもうきたりはさぐ此
花のよせいなり一とせ鏡本
平左衛門産本せしに同
平八大あたりまて魚見せ
や判皮鼎(びき)鏡本がくと
和句の作若例(れい)の西鶴雖
波の魚(うを)々伊勢の白粉と
評判の冊上と吉孫を白
粉所行中吉こゞ袖をう
段と分小さらく千と分今
吉孫大かく人間の作にはあらぐ

仏ま女がとけなし。なるゞ
ぐさき珠数きけて宗旨
かへられぬへと抄とりな
とし。いかゝしと答へける

(四)正月羽と事物語

かゝりけるとしろまゆまう
ごれ。唐口天休老は見也。
当年いまだおめまかく
らどまく延齢丹のおほ
けとゞけ。志びくの妙菜
よりハ重賣ばうらいと
将来申せともてなし
ける。天休元来なんぜい

利口乃入るまて先はとう
らいとゆるすハ寿命かぎり
なき仙人の栖家の名なれ
ばあやうり抱。海老ハこしれ
ゞむまで。聖老ハひげの
白き翁。梶ハ伐くかたら
ど。掛がうしの皺のよう
とよろ昆布子孫繁昌
の数の子。仕合ハ人まゝけし
とから栗。椎子門と出ぞ。
松ハ千年竹ハ世とかさ○
牛房ハ勢とつけると事物ぐさ
ものやうに息もつがとさてハ

万端をけしつもの法師は。
はなすとさじりせよと宗教
の男女二名の家編を変択
しまへとなしかば。其時
天体ちつとも脱せざと扇を
なとしぞれ清る物はあつと
なり。濁る物は裏むきと変
して其穀と書ふ。人民上
下の命をつなぐ宝なり。
あくともりて一体和尚。意と
いふその水上をとらぬれどす
むと濁るのふたりなりけり
とあそこをされ。又嬉乱上人

の法師にも弥傾の友人には
車の友梅のごとしひとつ
かけてもまけらざるが故不
自由なる其体不具と片脇
老とお枳なされたりそのの
説拙にはんの身のうへ
にもひとつで婿のあき
さうなる同もふたり。耳
もふたりぞあしもふた
りづく鼻の穴もふたり。
ようのはもふたつ。其外も
いりのあり。みじかきあり。
廣いもあれどせざきものの

ありて此自然の為れか
れを今けたらしめぬ不ぬ
とりて一方へかたばく
時はすなわちめれ莽の お
慈悲まりれて樂ミのち
まさに由よふ底生となり
好きの義にいたりがたし
いづれの方なりともはたび
底入とれそづすと方劫
にもよき目にあそどと
一心不乱にかせぐべしいづ
れもの論ぜしくも神の仏
の水波のつぎてこり事

あなたには肉説は通りに
通つておりしませども稀く
の高賢なる故に吉原に
ては聖命と稱ぐふ若性
生せととといひ木槻町まで
は傾城は無間の業といふは
穢がたきなり汚まる所を
好色は涅槃の桃とするよ
とあれば別の子細さふらえ
ぞされば磨訶羅禄師の
うたにおりてうたすむと
濁るとかそれどもなれは
同し苦あいのあとながめ

たまふなり。此の程とさと
らせ。向ひ家鍾とやめく。
めいく邪ひさき表うりと
給ふにかせぎのくと此法法
はおりけるを

又 急歌懺悔の和語

せりしなさ拘次の間乃時
計。赤子の鳴声。花季此
手拍子新町の一書を敍鴻
原の猛ぶれ。待人なき時を
更行鐘の声も耳にかく
らど。蓬悪なれは庭鳥此
聞もおそろしからぬど。

木男とさしむりして語り
あうとして気苦じなる
すはあらじ。新八小七も今
は天体の説法まであらそひ
とやめ。おりひくの思案に
成りせ人にかきなど世をた
のしむべしと申合せけるが。
おもそ今まで友人男女の
急拵びおりしくゆるしく
奥がるる事飛濤さんげの
夜がらりに。反古のそしに
書つけ。おろそうに仕しぬ。
高聖山奥の流に納め。母なき

傾城ハ母乃為父なき事ハ
父乃為。四里兄弟乃契約
よかきし起請も結縁ニ
誘なり。あるひハ色修行
に六十六部の文車ニ乃ハ。
日本西国の桂里よかり
祢し。孫子白人伽やろ来
巾差 歓愛可比丘尼。あら
ゆる気欲二道の枕かくせし
人数とあるし。一蓮浅生乃
逆縁にせどやと中合せ。夜
人かたらく咄せしなり筆と
けて金部の事

野傾友三味線

才二巻

目録

一 高野六十那賀八十
花代の外乃意志かけ
張倉新蔵も俳の花

二 かくるハ実里情俗
三人中間に義理の義
実の心とまぐりて両の男

三 木挽町の夕涼

中村敷るに生うつし
沈震に歌て年せんさく

四 大史の艶も京の水

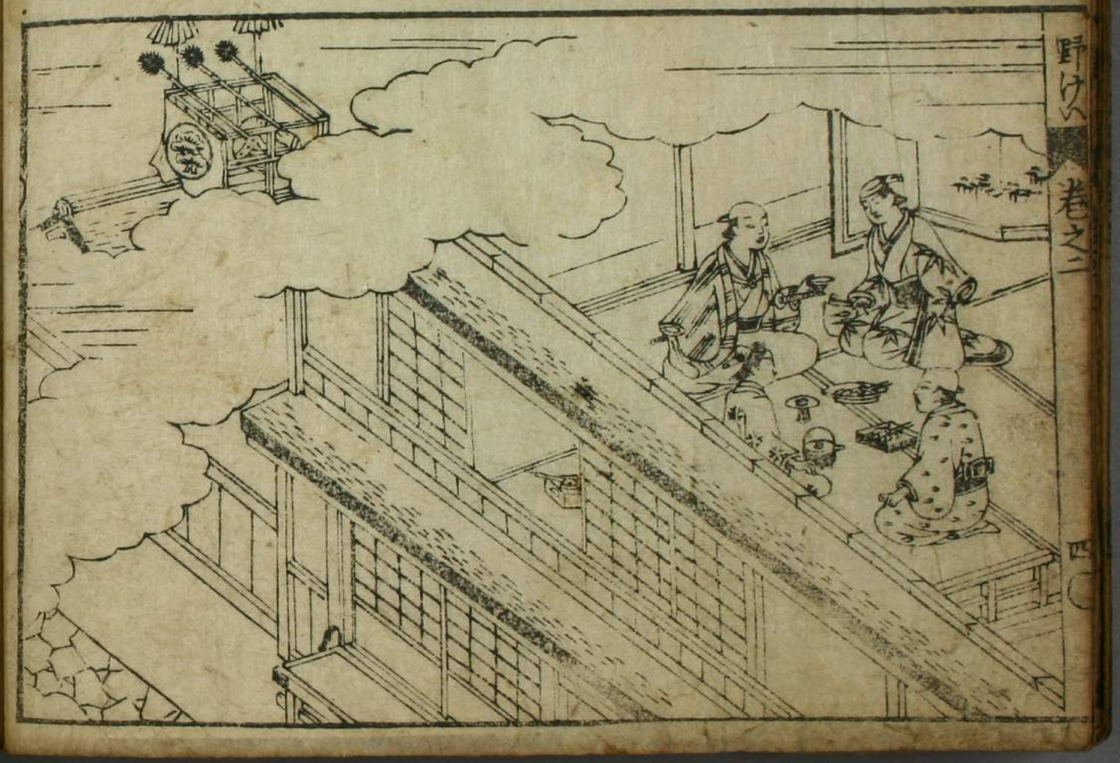
舎子三十夜の蕪云
大骨折て神会る方

一 鎌代の弁の衣仕様

鬼も十八とかしせたる鄙の
六十ハ種木杖まで花のさか
まと尺せ形智八十ハ種ち
弓と張眉に八字の書とぶり
袖の高巾と吉野につゞ
きてこ様茂とおしまぬ
僧なきこそ浮世なり
それぞれに大むしまる
右を左をすぐ名高き理
命ハ当世のごとく額も制
ぞ。是枝武角の定めもな
く背ハ六尺ありても是尺

三寸ゐかゐのふりそで
かびいすそう深の麻と
くゝ織にしてぞぐびろ
とゝふが武寸ちかゞされども
あとされに房つけて。ぞ
すむとびさげ。鬢は面金の
うへまそりとゆひまきこそ
ひたいがとあ方へまけ。女
ろくまゐるときいじろさ
さしのてゐぐひとゐ
のうへよりひしつまとうけ
てうしろへ裾とうしろやう
にかぶり。まへおびにして

京絵の扇とかさし。面白
の海原ぐらりや鶯より
かくたゐよがしと。笑ひ
とり二三ゐ。ゐらひ。大夫
とゝふゐを卒で小栗の
清水の脇。桶と柄杓を
肩にかけてるその姫が
相去のたしまり。常陸
小荻といふら小荻と申
あやまり。程の後鼓うつ
と。ヒト一意戯方の并山
と讃えて繰の裸織とゐる
さりて又意文抱つけたる



そくれ表もよろすなりは
一とせ二とせさりかどり
九まめまやりくより。万
年さし是てかの四条の
鴻臚まさつ○それは。浪世
とて花車見ぬれど。さて
もお久しや出羽の夜分
なこれはめつくしとて
りてなし。さてそんまお
あひなされたこ江のしま
弁の所なも今かどを
大坂名たつおつとめれよ
しりとや二三まもおの

ぼうなし。おみまくも
しんぜしまませいと申せ
は夜分ちろう夜せし
奥まで。ぱらびは高賣は
つけたり弁ミ分まあひ
まだりたるのあづア
より上りしなり。是より
すぐふと彼見の下り来。
あくれば八けん屋より罕
智能まで乃坂堀網代
屋方へ落つき。江のしア
弁の所をとらづ○きれば。
今はたれまや子有宿は

存せずとゆゑ。何は耕理
人の八年来ぶ。私存ゑる
子細ありぬ。引合せ仕るべ
しと奥の間へ請じ入。
猿倉彩花を呼でお客
よりのうづ◎とゝふは内
せ。座敷へ通りてゐれば。
田条まてかゝる色がゝまし
山がゝの大臣。これはおもづ
らしやとゝまとうてば。最分
肝をつぶし。自分は何
人ぞと宣賣するに。所れ
なされて毎の分は見ま

されも此を三年以前元服
仕りたゞいまは種倉彩花
とゆまするといへども
さらくかゝるおもりげ。何
ぞ毎どのとゆされて
もを付まてゐかしと
田角田面は若りきり
ゐるあいさつ。彩花も是
恥なく。若衆方はすぐ
は童戯方はもんぶる男
つきぞうゝことも存せずと
いふなど與さゝるる與は
て。飯ともくれぬ旅籠代

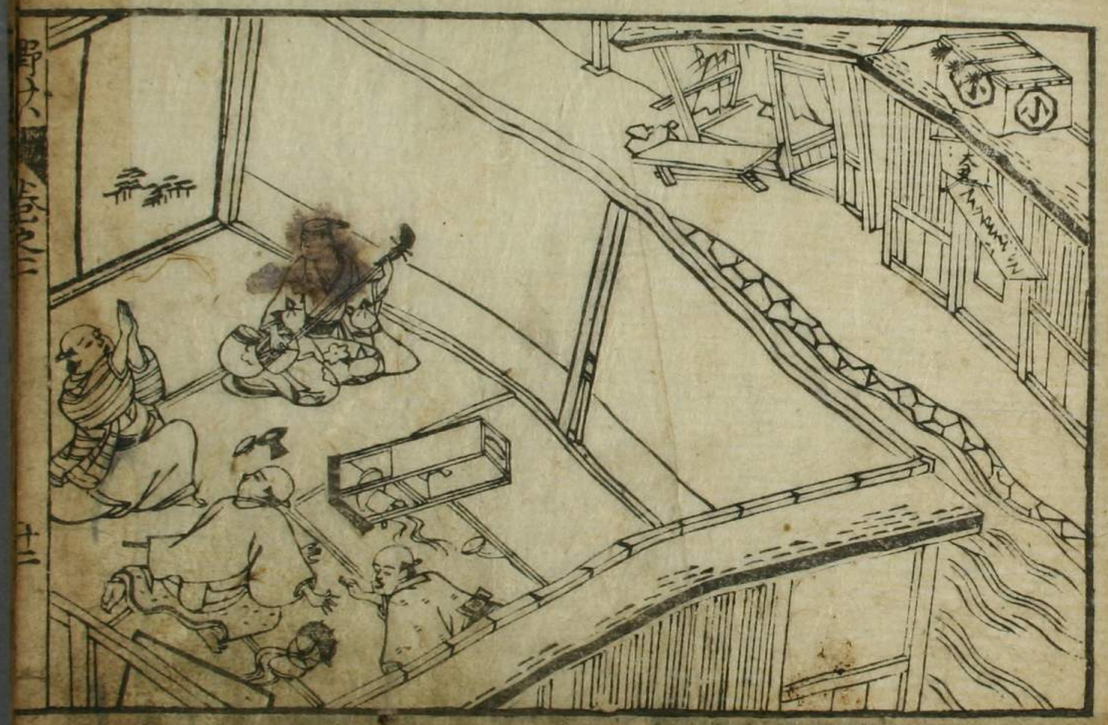
画て又京へのかりみ

(二) 宮丸をもちて物男
むし傾らるを名ゐるものハ
葛城定家。そのくち京に
吉野江戸に稽古大坂に
利生とて花も実も大夫
職にそかゝり。才一藝を
いひたてに。位とさゞめて
琴琵琶と弾じ和可れ
ゐにこころとよせ。挽物と
て事務中巣に珊瑚琥
珀の諸じめを以体し。迄
ろ帯にして。あらの位に

いたりてもぞろうふとこ
ろに鼻孤本紙にけり打に
して入ざるし凡流なる客
にハ女郎の手おにて清茶
とそて十炮香の舎を始め
花奢なるものゝ敬び
けるが。これ琴琵琶十
こしやゝて三体縁にし
なりて強らしの出所の
かにはてで十七小女ゝけが
砂とれと謂手なるもゆり
出。新世にハ朱垣ごしに
ちらつと見し拍子丹おに

弁当にひらきあらぐ
せんじ薬の間に見えたら
中べし。さて今日は大夫宿
老人買ましして法藝を
見物仕るべし。掛ちは又
大夫お東方に諸乃時。
おそ付は成ましき亀屋
老人。念の為にあてゝみ
ゆへと。かけ志めたる報を
出して。外に入用は又臥に
て取るべしと。万つちぎ
手分なる時代もありし
しりしへ。置させばあいも

おさへもなう無度を
仕り。一度くして高砂を
うたひ。吉野産になると
れは本願寺横へおめみん
するゆうに擦たてなとし。
さびくは道へまいる若
にあらぜ。命さへ所産らば。
又中合せて二三度此うち
になりでは。宿と出る事
なるぬ。皆いそがしき商
賣いたと共に。ろうかり
と面白いすとうたゝて
少せなへと。いづれも所



弘良まかつて望めハ。そ
と通る徳望乃若手まも
けれも椰の葉笠まさい
れも椰の葉といふ所を。
今の目からかれば。亂の
かぶるやうな琴かきなら
せバ。さても此いくすしも
ある糸を一時に。指ハ上ぐ
三本まで引かしまふ
ハ名誉なりと琴をそろ
へてあめたてけるこれを代
なげぶしといふハ。なぎぶ
しのかたりまて。籤の

を經○を上下まいらせ。
上下まゐる時分にハ業が
古うなる。面ろげのうつで
と和泉或ゆゑが老となげ
きぬるもおとりて老を惠
すべきなり。藝子の一座に
て業ぜんさくと。古人の
綱にはんとなり。されば二代
さんの中村數るハ。常ち
いさくかたりたる事と作り
そどぞもしくおゐ所方と
なつて舞臺と繰る三十
八年間風俗つゐにかゝる

なるべき子たちなり。公數十
武才より活とめて四十九
業の秋まで孫をどなる
家にも懷て稱られけるハ。
建行をしまりて例なき
世がたりといなりぬ世の人
ごろのかゝりたる胞ぬと
て。おゐ所のさらりハ其より
うへ毛臑生たるしそよけ
ほどとて。おゐ雲の寺ハ。兒
性の元服三十才になる
ざれバゆるし給ハずと雪
ふれたるなり。此ハ安雲

橋乃花火見に出そ。武一三人
友とせるおは。此あつさ也乃
富塚がくるべし。いざとは
そふあにまかせ。木挽町乃
裏筋にまれる事をとく
つま。抱すささまくなる中に
店一とや男紅と年八十八
九までいらるしからぢ。ぷ作り
なる男女を皇子のまし豆鉄
こんで花井取て他人とや
て。いまだ板つきの出身なりハ
あらぢ。ぷとしハ十六七と見
ゆれども。ぷつくりて十二三

おいとしがこれに出さるあ
とすくむれば。さいたいありが
かりてまつ取へ。ぷしく外人
出事をかやまとまがハ
ぢ。十三四とみて。酒あひ
一座いやなるなりひとりも見
えぢ。店一なりひめの紅なる
表帳乃眉とひらき。殘る
女人も別深の方へ彼とさ
つれぢ。いづれもさしあひ
是唯なく取ひとりと
一本の花のなりがめまして。
酒ようきなどにまたそ。ぷも

白う捲ぶ寒中。ぢしん
どろ〳〵となるゝと。地震け
しらぎど。菜桶のみをゆ
まこぼせ。所燈の地流う
つて。そりし火と消せ。笠
ゆ〳〵と肝とはぐして。猪
手へ逃こゝ。雷濕にかゝれ
念仏とゆまと。花車儀
り血のみらおこりて。
狩まきとゝづめ。こゝろ
げよき客も。さぶひに魚
と見合せて。ちぐしは
宮云の所人座禪乃

一座のごとし。ちかゝりて
ふと所一人ちのこともさ
ぐど。三体線とかくへて寛
閑一体乃おのゝ魚と雷門
流にちらべて。何ともない
魚つきなり。やうゝゆり
やうて人〳〵生うりさ
なちらまて。鶯籠よ
里気つけと出して。あ
まて息とつぎて。此やう
な時にハ見るまゝ蓋は
はれと狩飲とちじめて
西気になりて。さくく

我とおりましたハ最も分を
みぢんこりげなくなりあ
げてうくふて居られた。
孫女子たゞ居と引かへ。この
本男たゞ出とのうろうろ
やう。角閉なりしと大笑
ひもれぐ最も分ゑらが
の入る魚りちまでいゝれ
も自ハ法存知あるまじ。
此四十六年以前の地裏
はやうなぬまてハ法ざんせ
なんぐ
(四) 大夫の龍も京乃水

むりし堀川通日當上ル町
に屏風屋吉六夫妻六十
歳にをきまで。壹人の
子なし。老乃行末こゝろ
がそく。彼見の里より、才
三才なる姫と喜ひ。嘗
にを家にも老のこゝろ
かけて。おこやとなとは
け。親乃あまてあらひこ
乃法やとみぐさ源氏法
匂ひ水といふ鬢つけ
柳花の油まで鬢ハ柳に
手入して。花見の群集

とかくさぬ母房なれとも。
親よりいなつかしく。七月
廿三日に江戸をたちけく。
八月四日に京へゆう。母親
の思ひをよろこびさて
おこやりて問きて。吉六
伝惑し。母親されば大名
京のおく方へ茶の性とな
繰りとは。西国へ生まれ
ばらくしようりとこそ
なれば。吉内あきれて。を
西の念仏する者にはぬれ
しお池の天狗婆とな

肝熱の手まで室といふ
須城町へゆられてゆ法
すかよし。右角三千あ乃
令子と前まかけて一日も
体是せど。恋ま擣磨へ
恋ぎ室の名所をさがし
ありき。そづ○あひて年
月の雨存とかゝれバおもや
も海と流し。親方松浦や
久右ゝまゝらも今へあげ
まきと名をかゝり。うき
つゝきはとめ乃陪ゝみな
空まおよぶどと。久右ゝ

遂て右の法分妻細りて
うり。三千あ乃令紂布
たまなげ出し。はたび竟
恨同名して室へゆりとき
よし。久右ゝ空屈。清判と
けて君へゝろうへハお門
後でも奥ゐでもそこゝ
用捨も出産ゝねたあ乃
まいゝりしき出心産ゝゝハ
玄屋の施かんぼし。身を
弓箭いたすと。さらまと
手をうつて。さりとハ情志
のの親方と手を合せて

おれは及ばずとさつたり
と請体破つてあげまきと
つれて家へ急ぎ。あおやま
ふ足乃ぎんくいふ不へ休
見の寶文まぬ来り。大事
の人乃子をとりふて傾城
屋へいよくい賣めされたぞあ
りへ中よりてこゝ。急度仕
事をおいせうと申されど
も。今までのよしこゝを堪
悪すると。ひつたてかゝや
とつれて帰りけり吉内がん
庚申推量

二之後

聊傾文三味線

目録

一 男色丸化粉
平蔵妓をもらぬ田
見れは後生は女
二 北川へ一日論
小変はいきうつし
胎算用乃菜漬

三

三ヶ月ほの家競
藝子役者の程を競
なりひ出ゆと水月の盗

四

願成就の宮廻
唫ありもの面白き国
いてづく者といこれ

一男ちのだけ拘
かけたしや本当乃山里に
椹大明神立せなふ。生立
の氏子あまたあるよかひ
なく。禿倉かたぶき当居
らして。我とし月野干の
坊となりぬるを。名を八十
八の年かき切りに。此家れ
處にまゝで。かたら寄命を
ひとへに当社の加護によ
りて。孫彦とみる悦びに
あへり。家人子孫の祈りれ
ゝあ。洛後無異して。いよく

栄好者と仰がんとおもひ
さらぬれを。境内七十間
四方本社東社鶏籬華表
大分の金銀なるてハ殿鈴
しがたかるへしと。七村の氏
子と集めて評定するより。上
熊の五人組所出。世上ゆん合る
ま蓑角芝居るまて殿集
乃能力と称じまゐるゆ
あるべからずと。談合これま
極まり。扨ちゆるべき芝居
まハ相撲か。あやはりか。斎
露姫かと。とりくまゐ沙汰する

中ま。いつまても云平へ飛
乃出る浄瑠璃なるでいと
いふ。これハめづらしげなし。
斎舞姫よろしかるべし
と。論談一定しがたき処ま。
拘なれたる庶屋。竹田が大が
らくりま。間くまゐ子を乃
仕形露と入。乃行まハ浄
るり。粉光に入。酒天童子
も。胡蝶かもあれバ。友方お
慕ろまゐ。一座同心して。九月
菅原よりはじまりじやく。
これまつまて。いろくの小見

世物あり。魚ハ三十二おれ
女。としハ十七されどもいかな
ゐる色の葉うや。三本足れ
勇人。アルれバ後生まなる。こ
れや。中くく。母彼の面よ
里のかりまし。鬼法めく
鬼歯がよ下ま四枚まなこ
のひかりハ猫のごとく。又体
ハ破れ障子のごとし。これや
中く。鉄後の浦より網ま
しつて。遠あがつて。海坊主
共今蕎麦切とらへ。それ社
で六方のかり出し。ようこ

六夕。銭ハ廃り。此六四中の
祭文太平記の諫尺まで。
うり屋の形と並べたり。此
を世乃者。伊勢系りう三
十三重の順礼の次第なり
でハ。かゝる芝居ゑるすな
れば。屋の星らま舟こで
やうまめづらしく。又星ナ
里守傳へて。張紫するす
おびたし。ある日からくり
の間ま。梅屋混大踊と。子を
立そろひてそじめける
寂和しま。望木村乃若武三

十人。一夜まそらつとと云さ
ぞ。鼠戸の札壹まつかと
つき。殘とかへせと嘘候は
なる。子細は今踊る子たは常
乃人名なり。田舎者と阿房
ましてん形と嘘とつきこ
ま。札殘とうへさげハ。芝居
と罵せと。口論すると。肝契
中間よりあつかひ。なるかど
これは人名の芝居まで。こゝや
こ方まてハ奇麗ぬとしてハ
しなりと。断と合はさ
せけるこゝく世界はひろし

今は狂言盡しまつぬ国
もあるぞうし。此里乃大
盡行田が楽屋へひそうは
役と云て。野台と覚えさ
よし。掏まこゝろ持る男
ありて。小坊主は花鬘
とかけ。杢升艶と小紙
ましのぶなどゝかをつけ
て。今剣姫言葉と結ぶ志
そこつかけ。茶師
堂はあつまり。池史なれ
を茶なれば石拝は杢の
ありし。其中は縦しそ

夢とみせて志ばらく板
どろきけるが。艶こゝかも志
のぶも。鬘放きたるまお
どろきながら。坊をあた
まをかくさんとする間に
大曲目とさゝ申し。艶どの
志のぶどのと。鬘ぬるとき
鬘と袖に隠しかくや
武人なりしかゝれすし
さ。我くは重めしつゝひ
の小坊を左りて出ざり
ますると。桃鵜のこゝろ
き。大尾すこしも気がつ

うごと。宮原殿があけたら。
追付芝居見物にまゐり
て。出楽と狂まんと。さく
ろ切て頼れ小坊を生
(二) 胸算用の菓漬
黙りしごと宮りしば。日の
永き時西方を一見せば
やとなりひたり。さるのれい
ゝゝぬ所なく山の油かく
まかり寝して。急がぬ旅こ
そ面白けれ。江戸と今程
の七ツまたりて品川まで
や。日れ着しは何と居業せ

しゆゝしらど。三河屋より
茶鞋と紙てハといふ女。か
きつぐらに棚橋のちらし
掛樣。家名にもまり過ぐ
る仕出しも。ちらなきにハ
あらじ。盃の蔭絵にすゝき
武蔵野とあらはし。かゝ
るゝ蓋ととゝいへど。蟬と
蛇と蟹。すつきり秀句づ
めの所具掛。ひしし見て
これもよしおく花。この田れ
鍋いつれても後ハ書くだ。
る別ひとりハさびしく。

二三人泥りんでまいれとゆ
せバ。かしまりて柿樣一附れ
ながめ極くるあいさりハ。
脇に箸。吸物に小づけ。客
より女房にめしあげられ
けるハさすがあづるのをてし
なき風俗。なるたまふ方れ
納戸食かきこゝそ座敷
にて箸とゝねよりさらな
きなの奥もしんなべきとよ
めるよりおりしきかゝふも
ありなん。寝所かゝりてあ
かく夜もむとゞけす。よひれ

妻すゝ男ぞつゝさて宝屋
宿の小家も隣の二階より
て守ゆゑ。阿られぞ宮乃む
ら消といふ兵庫うとく。
おりりと待とはぞゑくの
すて詞。微塵も意ハ知ら
を乱敬じなる。旅より旅
乃一夜妻出油赤坂も同じ
格。くふまふたりのあらはひ
なく。紫名の焼拾店里の
井筒屋に泊りと定め。別
漢のおかめはとへば。去年
の去嫁入して。年子ふたり

おとは懐て確ふたり
品今まつりべし。おすつりし
くハ呼になりとも考べきゝ
と。みなまで守におよぶと。
あすハ関の小まんに。久しぶ
りて背中と流させ中
さん。女も子と産にハ。薬所
物し余所の世話やいても
いらぬ物。面白ひとぶり。
いな可て。無常れおこるも
世の中。海りくらべて横田
川と色。石船に入おと守。金
吉が富り。おりひの卵なり

なるのなるべしと。吸つけた
ばこは猪の煙にさらそひ。
みづるもあがれば戸をさして。
熊丹の夏のうき世や。かく
ろ契りはあらくしし。[illegible]遅
[illegible]もあらば。京屋の二階は
京もよし。ゆるりとれ口ぎん
と。燒は柴といふ所乃名は
あふむの袖をひかへて。打し
き床ばなれ。此男も一云に
かぐされ。秤とをいはれど。す
こしはたづきごろの百板
と。禽車のよしにはつせば。

やがて右にぬるの茶尤りに
あしの清りの殘。掃糸中
せば。鳥目はむさき袖のやう
に。たばこ[illegible]まばらつもと
荷ゆしがさせろとさりく
とまはとうらに分別か
はり。あしは二三しさせば。
京屋は黒土もふまぐ。只船
くといふて。武人に荷はれ
てあり。今の世に地を掃ても。
一殘出るあでなし。あしな
どで礼はいはれど。かさもて来
うもこまひもこれどぞやと

いうてぽんと出してかくや江
あつめて猪口はなげるに秋を
通筆なりぱ清く〳〵と思
案して書東と呼てぱ
見えずぷおさめの菓碗なり
隣家の龍きく葉とともつり
と硯箱をとりよせでかしこまり
けて硯で書ると一口のんで
これはあんまりあつさうより
隣舎ともあて筆をとり給へ
㊂金龍山の舟價ひ
いぢくはあれど金竜山浅草
より舟と済へて出ぎげしの

流れ源しくゐ廣けし中向
声おもしく三俣の水巴さ
ゝざさと手先遊ぶ桃仙の境
ちやうきがごく〳〵個灘の下より。
藤倉に個としてよし相菊
と梅系中せば是は又飲みぶ
と早川初瀬清井まくら
三尾木難波宮の東源八金沢
ゐ手ぬき舎廣よら西堂云所
しおまりつとおさへて同じ村
ゑのねらとおもはず飲りけ天
は乙女し母にかはりに八郎の
客よ八今も舞と蒸ておれ

ぞろくゝ見えしハ見えて是。此ハ人
山川のすゞれと。紙にけくれ
て上方の土産にする物なり
そといへば。大坂乃友禅系天
満橋より田ゞ足六人水子
の川出産に挑焼とりしつ也。
陸奥山まで穏屋形と並
だて。吉畏求るあやめ。千
鳥源次小勘たら次ちに畏
紅たゝ雨じつまに。今子吉原
浦浪鳴鳴八も通しむかし。
楊田橋に舟つなぐせ。祢興と
弾えるんまくせハ安治川白中

のごとく繰出系の海まで引
つけたる琴三味線乃調子
に鳴戸もなりとしづめ。夏れ
もうしの浪後ほとへてなる
べし。水上の楚楽西湖にみぬ
もろこし。家士のかたりにハ
生絹山。周裏柏のなき代
に。生綱いきてぐ働く。楊綱
かくべしけなくも。仁徳のひ也
文化りなふと。ひとびれ下り
役志の中より。故郷暴貧
すこし耳にさつりける時。
今沢又平江拍子にかくけて

そもく今の京の涼ミ川。
あるしハらげの賀茂。川手洗
の瀬見の小川。月も流れ越
ぐ。てぞもし。三条の大橋
より東ハ大和大路。西ハ高尾
町。四条ハ東西の石垣町。河原
の茶店。行燈のひかり。二階
のとりし火河あるようつり。
星林あやすけて寝ま茂。
銀河澄り降るがごとし。浅ミ
ま床枝千しそ並べ。琵琶
和琴敷弓尺八男女れ夏君
天井のなき楊屋ま大よせ

しるるまに以ちり。鰹鮭の燒た
なびき。鯉燒と匂ひとあ
らそひけるよそおひハ天竺
漢土とりそのゝめしと学ず
と。三ケの津の豪気。自慢
詞もいまだおもうざる正へと
られ馳の舟より夢かけて。
山中九ヶ村ニ古たち。穏食
長九郎冨沢五代ミ命と称
山かりん。大坂ぐらの者なミ
歳ミ命。大道ハ石町の廿
二といふ男。二艘なるべてしら
ゆと飲わるし。残る月つれ

なくなりて。雖食時なりうき
物ハなしといづまも宿より
ゆりけるが。此夜浪費しかゝる
あつて情ふかくぞれ好といふ
義ハなしい善のるすなぐ。
悪しきれなくひ。家しめ
やうにして居なる事をと
ゑんせど。男をまとらある
客。一度のあふ所にわれて
も。又忘れがたく。寵殘さず
といふるなし。費しかゝ金
剛に水月源氏にて。いふ
しへハ夜鞘の口をれ。種たる

一本も持てきを據たる時
より。お髪にみたれたる。
踏柳まゝ巫とゆきを陰子
に踏分とうち辺。獨模を
なき仕合より。孫に芝居子
の攢扱ひなりとも。浮世の
ゐりひ出に。此まより費しかゝ
が弱づけとなりけるが。常く
なまに行しや。うゝ浪の陰な
くはとゐりひくづとれて殘
がふせ屋にやどる月より
和に。此恋所存ゐなきうき
せに。何とぞ皆もあらぞ死

めるに胸をさぐるめ。こしらひの
強弐に所がうつくなき故。
ちらうに無と繋をはて。
糸じけるい不をまんまと
盗を用をせてりくや思ひ
強をなすなしと独笑して
扱。貴に所用をさはし。雅も
あれが故屋のうちへは来ぬか
と問けるに。源之来何とも
ないかなつきにて。備もまい
らぞとゆせば。何むさやき
ぬふけふ宮がないようにし。
宴想を見てさられ

四 郷成祝乃宮廻

祝宮は四十来社。内宮が八十
来社。合せて百貳十来社の
神くの名も。今はしれる人
稀にして。宮乃君の文め
ぐりには。籠芝居の看我十郎
の所が親父。寄とみなが男
を。お出ふ内中さんとさはに
よりて。西乃宮風の宮。舟の
神槌の神。これがむしぶの神
こちらが大黒の恵の御源。これ
が女房の神。裏へまはれば。
房の神。これが狩夷の神。それ

立てつんぐぎで。さらぐ合はいと
小便に出るやうにして。関と
出。豚へまつり書院床のやう
なる鴨居板のもとしより。
おもふまゝにさしのぞきこそ
れぐ。男ひとろ夜着に枕と
ならべ。胴は一所に命と鳥の
ごとく。何をいふやら知ふやら。
鳴やら。もつりと夜あけに
なれぐ。こゝろと思ひは異の
地蔵とうたふて。るの玲を
とる臓蔵の食の下とさき
つけるこれやはしも鳴るも藤

ぬ家来して猪にむらふ。此
江戸男うつりとむまい
所をのぞいたる臭。板に乱つ
きてくなれぐ。無理に汁を
なさんとせれぐ。衣体ぐらけ
るがごとし。泊り合せし旅
人よりたつけてこれは不思
議とん鶏するうちに。目が
たけるとおもひくの事
に出て行。あとにはこの男
其人痛や絵がたやと。おと
こ流してたちすくそける
と真ゆつけてこれは

るまあらぎて立ちまとれば
鬱窣地神聖と齎めまふ
とかし殊に太神宮系
語の人不浄なるをとのぞ
きたる神罪なるべしいつ
かその魚離れかすべき。時
良もれざるまなれば君と
いうしき不祥是非なし
と。魚のれついて程板とし
切ぬれども。猶その板なる
れざれば。公中に行念し
て。故郷とさしてゆりけ
ぶが。此時よりぬるとりぬ

ひき者と板部といふまな
ばしまりける

やけ友三味線 三ノ終

野傾友三味線

目録

一 諸法を喰て極る愛世餅
柳はみとり悟りてもを
釣は清つる爲に人魚

二 只もぬるまの楊弓と鞠
黒柴は茂ぬ使ひ
人間ではない参形の花

三

陰君の拾杵ハ隠し見ゆ
小野ニ志げまハ歓役の者
坂田小偽次ハ今の吉田屋

四

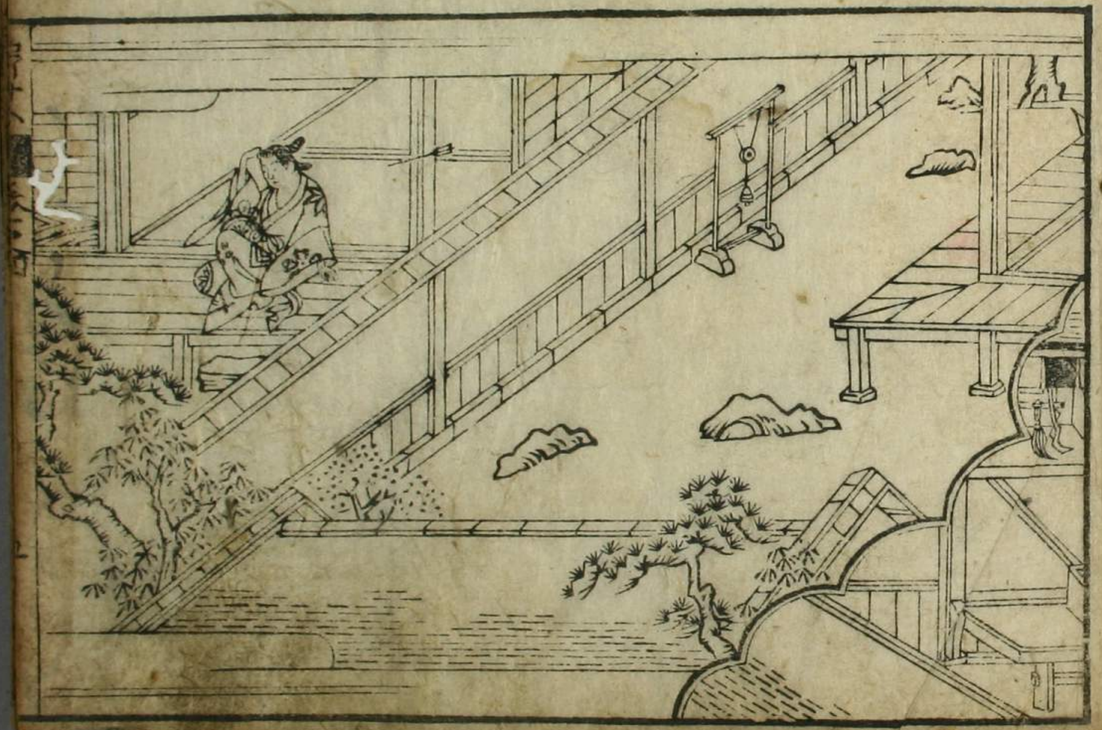
よし原一尺ニ二間充　男
新花乃口舌推量乃介
茂菓の清りひらき
是ハ也

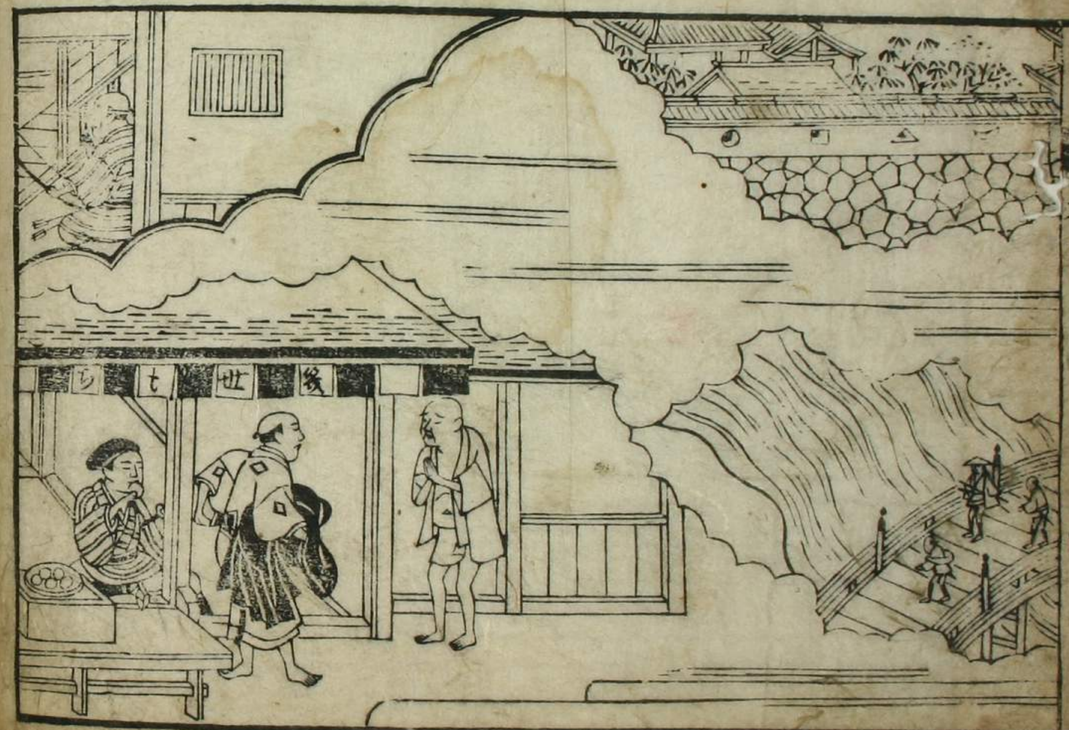
一

読清嘗に携りて世解
惜りまつる厨居士ハ能と
清らけて富令と繋ぎ独
誘獄師ハ田楽見世と出して
味噌と摺がいりかしてもむ
く葛湯と仕始めらるれば
紅代ゆりぬしなり後に服
塩とうほして其方あり
らひより仕さいるまして流れ
に清の世話の中にお本来
面目あるまとしてぐ飛ハ土が
庚のかりぬしらひとうの
名蓋にて面白き世の表は

これなる柳はみどり水いさ
きまれ夜雪橋のかたうち
いく世餅屋又云来といふ男は
そうしき世をたゝりの中に
碧巖無門関ればと始めは勤
学せしが一朝茶釜の下に
抛て煙となし。まとうして
知ふまうこゝろ。見より閑が
つもり月と見て雲門の奇
賛といふ粉匂とつゞねける
よし。ある僧ちろ見まわ
ていかなるかこれ佛とこゝろ。
又云来答て来世餅とかせば

は僧やがて餅と十四文はか
むで咽にもはらどうんのこ
殘なき時いかんといへばその
間に夜とくらで去せけると
りや。さらりても雪のふる日
は寒く飢渇時分哈度にハ
こまり果たり。又云来か素れ
見るまさ巴屋乃獨山か風俗
にして拘らしハ三浦の高
尾にいさうつし。われハ紛知
りし天ぐりけるを擦りて
乖る方にもなくてハかなる
ぬハ逆なるべしと浦にしき





淳乃穆現も初つまでかひ
なく。せめて国の正月と出
あるに以合さるやうに弁義
妓子と見て。此世のものしき
にまれば。ワげの芸居義に
てあるとも思ふまさつめ。
公村出る更かんり粗言見
まかけ出し。鈴木平吉水木
竹十郎。萩聖八室桐袖濤
鳥織。夜公欧のきとあらそ
ふごとく立ならびたるに流
けても。いんぼうといふ一物
なくしい世にすめるかひなし

と。折しきれたる意の中
ならぬかならずと兵常のおこ
ろおに。十二三の若石膝の
おにまゐ物して。さまざまくう
しろむきける表面百の媚
あいて。義者の野秋鄙さ
あるがごとし。燒しあるうう
つり君よりも。粗言見れども見
んど。不思議や供もなく。つ
きづい人もなし。座とゆ
づりてゆるりと置て。蓋の
果と結けるに。往なく進
出しの嘆ぐ中にも同と

ゑるゑこそ其名をしたひ
出てこれハおきく人名すぐ
お供と詢さき寄。菜屋よい
ざるひつゐる情乃床よ
うちとけ。しひもよらぬ
おりひ出。いゝ月日の法
孫と浪とこぼしてぴとじ
けるき仕合。陽師はつも
つて算用すれど今剣
かけて今子其あの所ぞ
ゝ食軽までの代物もめて
かゝる英軽まゝ入る。極楽
ちと去るゝ幸らしげ。此の

匹おつけさしいたゞく和
入且那ハちゝる居られます
かしこ。にがりきつゝ男まゝ
里出て。村の印お隙入まし
ぞいざし男ごしらへさせ。
今子武角ハ花代。武策三
百文ハ入用。さてハ是ハ
二 只もゐるまゐ楊弓と鞠
隙なる男も寝てぐらりハ
着しかゝる夕着しづゝる
さいたい庵ゝ市化あるゝ
うせ。鞠と藝古すべきしひ
ゝらぐじめより男ゝ癖の

つきてぶら物しいへ先蒼
袴うりそめて常をいて。
郭から晩まで追まとり。
四五十日に鞠と四つ為に
踏破れども。いつなるすろく
にふたつともあらざ。面
隣より彼と立て。ぶびく
鞠それきたり。秘蔵の牡
丹苟菜蒼の付たる菫。
六七本もあれ。そのうへ八十
に成り母。すくし年を
よく。漸坪のうらへよろが
ひ出れ処に。又高足嫁と

鍼鍼痛まで熱枝のやう
なる頭にあたり。即座より
絶入仕下と元気老に新に
て。正気は付たへ共。老甚乃
病後のうへ。又この悩に却と
なり。急にお果中へきも存
ざれど。今中てかくてぬるすなり
らき人の母に踏殺しなされ
は同じ死れ仕合。いまだ出来に
落中さずはへども。母死なに
いたりはうへて。一云中読し
たれ彼されありと。急度出
たる彼と鍼けるに。肝とつぶ

娘がより竹垣の綱とかり
ともろせて熊手すべき筈
と。今はおちぶれて一門よりて
かけ人となりし。先鞠は縁を爲
よて鼓打のごくしこと
て居らるゝ気づまり酒ぐら
能でもゆるされど。常びく
家る楊弓と結るべしと。縁
よ格子の間より臺所とか
さつけ。奥座よ棚とよく。
毎日射ける矢を拾ふごとく
らんざゆうりんと。鏡の形ね手
とつけて居られたつかまつ

もざろ所よ裏の町の酒屋
より役きたりて。お月よかゝり
さりとやとぞ。附でハありいぐ不
義なりし何事やと立出て
きけど。酒屋の主民駆動よ
あまりとつまさ。是非やまゐらハ。
私娘當年十六にて宮参ハ
親のにうしと盃ともし。
下鞠より五れん拜卯の毛
取しも。旅行脇よ生れつき
せどとらよげとおさへてと
炊系積ずれた。縁儀いくや股
才書文のづひわつけされ

あれば此所後合にいとひ
もとらぬに。彼の男まづ来と
おぼしめされいと。太の姫さま
孫辺の乳母結り。当月の来
に送りつゝ此弱来に移り。
宮中みぐさくてる風にあ
り。背中とふかせて居る処
に。流れ矢一筋いづくたなく。
たりの目にさらり。気とてあり
しまふ程に。勅願結り此係に
せば。焼事にて揚弓師小倉
文助とこれあるにより。文助と
呼て矢をと問ますれば。此自分へ

きれふぎりしたるに。そのうち
へ宮方法家来の方者。いかに
町人なればとて。塀ごしに蓑
矢はまつらぬかと。無作法は二
服の紙。弱来いたせば。私姫なから
人の女子。結文仲人。祇所悔に
なりと申達しけれ。先に妹への首
尾所目に成るうへは。慮云と
申しるに。慮云行た一分立が
くしとゆさるに。此うへは吉人の
娘つまる所尼にいたすと存ぜ
れば。拂云ありおのうへ笑。笑作な
く。雨存おきいわぬれども。仲人

北國浪人云まで。一生嘘つかぬ
法人祥。此人のまおとこ。聟ゝる
者の方へ乃一分。何たゞ中こうけな
けまゞ。法弓勢ゝかけさせられ
さ法不祥なれば。聟何某が方
へ。始るへくなくりなし。粗とねり
と。勾面よくはとゝとひ口りけり
ま。なりひりよくぬ雅俗。鞠の不
調法ようら法ゞきゝる紋御
惑る方。あれ全く意頭きゝ恨
まあらば。怪なのあやまち。さう
く家重ふもお俺中よろ此ゝ
志て役ハ取し。西室ちの和尚と

粗と扱ひて渉しけり。一門よ
りも合。とうく宿に居ると口舌
出来とれば外へ出ける事と義ん
やめなにして。毎日気候に
出りけるとそ面白なれ。一皆
ハ三浦の小紫に強食屋どく
遊。されハ年とかへて市村
が芝居。けハ浅草浦ハ水かへ
て水川。千住八黄町も一通り
奥あれた。色事ハまれかゝるこ
そなしけれ。さんとこれハ格れ
ないといふ国に出あひとし
と。国恵にぶつて。板橋ゆくり

まぶつきてうちくだれば。ぞろ
とすろ程らめくしいといてゆ
らせとへまるかいろ女。志う
もあぐ一人。おまりは不審な
ほどと。さきへかけぬけうりと
これて取りくれば。ぞろ程どう
もなるぞ。身を極めてもぬと
ころへさしいれても。汚れなう
もいるぞ。神原町までつぬま
詢き落して。志れろ草履屋の
かゝ隅と。かりれ枕かどくうれ
しきるをとりて。此女滿息を
汚ぎ。滅ぐるころ寄まてかやう

ま到深て後ハ。なりしひの種い
けの世まゝ云るべき。私と寄
れ人と思ひしてれお情と。皆ア
で少ま及ばぐ。りてめなぐ
かうなりかゝ。さとへ於床の鬼れ
姫酒天帝まるれ妹子ても探が
池の大蛇が響じ。ろおすぐ
まてもちのともなりひまかん
なるれし。さじ稲荷夜のつり
りしめなどくいふやうなり法方
なれば行りとしけるしといふう
ちまもや。鐘が鳴鶏が鳴。夜の
わけぬ西ま生れぬ口わしさと

あをたにしく立てゐれけるが。
さうまてかの女のあもかげをれ
がてく。けよと菜にも魚にんく
やまぐ親さ友よりひあア
まてかうくれ英形よりそめ
乃髪りその詞の末さぐ乃人
眉よあらぐ。神をとけの形と
現じなふ。巫山乃神女などれ
変化よあひしとかうりなれど。
それは眉のあいよ瘋はなつて
かさいふいりふも眉間白毫と
拝まれさせなふ事まてつかいを
くろありといへど。例の名跡な

とし半九がいくづく姫とまぐ而
ぞんじ奉いたしけるへいやわ

(三) 陰月乃捨杵

花ハ春なかに和紫乃樗ハ雪の
色と見せけり。これ毎年かくる
ぬ世の風景。ぞづしうらぬるに
おどろく人さしそおろかなれむ
りし小神山ゑづまとて雅波の去
ま。梅のさかりとみせけるが。かど
なく宇治なのと名とつきく。
大山俊なのが歌役の身ぶりと
なるひ。さてもかかり果たる所
元のうつりあつてハ悪人方れ

邪魔なれどとて胡夕猿に
むかひおそろしい魚と無理
にこしらへけり。世ハさまざまの身
をむしくにかくりて人ハ憎まれ
商賣も草の種なりしに。武
蔵神の紫末乃郷と洗て名
ばかり名古屋の実れ松の所
らしまとぐまりぬ。同じ時
代の坂田小伝次花の姿乃
ゆかりと称して。吉神や宗法
とて東山乃桜見に志れる
男がかくるにつけて。浮ケ寺
開帳の相立にあつりと

たり夜田ハ平次ハ熊谷次郎
李実ハ下来ハ西七ヶ東
京清ハ かやうの物ぐらり仕れ
ど。厳が古う中ゆれた。きのふ
そふのみなり。鱠も鯛も喰ふ
物こそ志ろまち。田舎侍の侍ハ
京大坂一ヶ本もいひそなくてハ
かなひがたく。病気になりて
ある湯治の次ゐなくでハ生
身の板つき治郎のまじかり
不自由なりかたりに。鶴子ひ
そかに旅芝居のわからう。
絵くの屋敷へとりこせく。

大夫とおしなへてあやめ。みち
とせに一度ひらく花のごと
くになりめけるにも。賣賞
の事私給ハいづかたも法度
なれバ。新屋くに一夜二夜
げく人目志のびて。法楽のやう
に両かり飯に酒ゆるし。宛ひ
とつゆきへこと無理酒ゆるせ
郷たなるぬといへば。それハひ
けてえやうハ具物と。今剣が
おじつを出れば。法侍とひけた
とハ。此一座ハ格外の趣興な
ものゝ。大かたの事ハ当のがしに

さと書給はれば老人の所とはらん
相公のせりぬとりつて御挽ん
ほ存る限御ことゝはれば老人の
幼女なれば少しとけらる侍ら
ゝ年。服さへ切とおもひて盡と
喰しぞり。信思しうけ也バ。
跡やくさいなう疵つけて
怪ミえしく那様よかりぬ。是
各別なる國中の名所名なり
て。向後は法間のすてんきうと。
改さしべしとひしめれをる

(四)よし原一見ま二月朔男
富ハ稲毛ほ似て花で蔵乳を

宮よりれなるが。火燒もよく年
ぢろまなりて。火神引よせ。
原ほ杖つきの乃れ宮の六百ゆき
揺けしくうしまつけてこそ。
さそふのあらぐとおりふ西本社
東分の家所をとづれて。此程ハ
行くへて。かの里の役も岩橋の
夜のちぎりとなつかしれおふ
し。夜お井筒屋老兵衛方より
うと宮身請のあらはしを。祝
奏こゆしみして告来るまほ
け。里ぢろまなれば。御祝の
とく小倉まはまけありて。退し

め捨て角所蓑屋の宮中初雪
雪屋の小夜玉川茶屋のあやめ
伊勢屋乃かる藤桐屋乃小ざく
らずいつとしたりしまゝ人の目
をぐ栄麗なる抱なしこれにて
身ふしも悩むがごのるに擲中
千五百人乃中にはあるべきなり。
さりとは同うつりて公一人にて
まことぞかくしより殺ぐ歯
骨の浴ぐ程殺てしたるが子
万人の少なれども。別深といふ抱
ありがたく。手の雅く指乃一なり
さらぬるもあり。常にしたるの所に

黒痣にびつらりともれども。一念
むまひとおもひつきて。芸の句
お内絶ぢらひを吹かぐとまる
と。五寸局も揚を地にしたるむ
りしの揚に右地が活りへけて来
てもいかなる。おう屋いにしたる
ながりにて。微塵意なし。世に
これでこの田姫錦とめを奥れ
も。裂鐵と黒て片目でも。胼
足の脛の黒きにも。通とうし
なひ耳がひとつなりてもが一
なおりても。食ふ口がなければ
行かし。ふらこひとつの大事の抱

餅屋の看板出して。膃肭
臍と賣やうかをの。まり
風どの。どうしたこうけあり
てはちくこと。家毋産をう
けてはあひくき乃頃なり。
書風すこしもさしがそ
中まけいたひもいなりのな
ましたいつもはが。ぜんぜ。さ
いぜんたり乃はしまへ。
こゝひいたゞめてのはぎん。
をはかりはされども。身は平生
風邪をつとめ。一寸の隙なけ
もいぶくらるすなぐれ

ゆへ女郎がめつくしいたり
よりてはまりじやと。寝
たり起たり思ひびやあて
びやといふすもなり。それ
がくるさらしも汗あまな
けてつゐり笑ひぬつと
めたゞまりてないせろか
い風りあひましたれど。
をずいぶんとまをつくし
おゆまちたがひましたこ
ぬしゐよそこまくな
をすがれ乃身いさぐ先
なき身のはぐりかきせ

やとく古寿ひりよきまし
ここ浅りぷ男がありてとそ
はとめもしてぷまあぐ
月日ををくりまもれぞ
ちしいろこしてかさひく
乃あ衆といのるとゆ　ア
しさが浅氣しりいらぬとて
こでいきれかもうくさきくし
か命がないがさあこれでも
数ちゃ不乃よくがくぐり
まぬぬか
老白純

御似交三味線

目録

一 漸よかりけり堀江紫宮里
これハ新町一尺の名を
又床常と旅店のひかり

二 金二拾匁ハ三寸の舌
意と無尽とさあ安さ愛
地獄の海姉と宮穂

三

深井ハ佛乃花畠
とゝめて殘る夜録の天
尾りなき曉の鐘

四

京と鄙乃思ひ
各別世界の稀あ
今報入性乃事はじめ

一

淑にかゝる堀は紀里
いばくハあれど雅波の大湊。無
日千餘艘乃入舟あれバ出舟あ
川て民家年々立ぬべき繁花
の煙雅ひにけり此御製より今
乃富教まさり。水辺おほく築
地となれども。河流が池も。町乃
真中に湛へて。一向雪飛此無端
さゆるなくつゞ此茶店ありハ
名女すぐ此花とせざりて破
戒極望の凡夫とも引接し。あ
川いとおりへぞ陰まさづして
房ばさ圖にてあゆぎさそ酒

が鉢くさけもばさうづきと出ひ鉢
が喰くさけもどん細の濃焼鍋のさ
身まで見て見ひ。腐くこれだ
いくさびでも。まりせておけろ
の真ナ至振。拵采世男の志なと
乃拵。細眉まゆり袖。うらの肥さ
なはり袖。かしこまろ。後家風
合点じや。九たこころへてどあ
まさびかしさぎと。庭生の様に
熟じて利益のはめぐそ。せぐ
面まさのしむべきなりはは
くく世のうつりかんれうこそ
ありしけも。むりしハ此あるより

流速の海にはべきかそろし
き鰐鯨乃寝所なるべき所を
ハ人間比目の抱に腹鼓と打て。
うたひ悠ぶ行家となもろる。
上ほなる非も此家知なりけし。
されば今の新町阿波産越坂町
吉原町乃四箇四町つゞけば拵
町の亀里始ハ八軒屋谷町にあり
しと考長武ほに堺箇にうつ
されば坂埼にかたり。又南町を
ひりしに元和ほ市にし新町
にあいまり。最卒ほ市にに天
波二百度乃名町とおなじく

バカル男

あくよ乾と並べ延宝三乃とし
弥生中比六日より諸人群集とい
ふるさまりて座席乃躰も
それ日月ひかりかゝやき面白やと
称りけれハちぎりぴしくら字
くさは定家けんもつぞと字が
内よかづき。是ぞ三乃岡山中
なハ六百歳乃あかつき書あらそひより
うらづき筆君がほき墨いし
てぞさはいまた変るとぞみら
ぬくゆるし見しさん友なる
かうし田丹波屋乃ほゞるよし
御屋乃あるよ夜浜前屋乃喜兵衛

こふ瀬川が瀬すゝのにほひ
なしハ本と嬉しくて様ハあふは
ぼ能ゝら花。菊枝大鳥羽のが
ら。瀬のふらて紀八金壇月を
ひよつ新ハふる所。ちび詠とけ
の暮まで千三百廿三人と世に
めが懐中記よみてよう。言ま書
識貌福の世の中。六振ニ寄ら
おとしまでかゝる色柱ひめいく
の蝶々のめ中よあり

㊁ 三振歳ハ三寸の香

されハ大坂所の横手小路よ村
とらて奥あるの村。揚屋所とえて

武拾七歳三歩なけまゝなりしを。
村の人の事を知るもいひぞ。去る
も和泉の客さんの請出さうと
おもやんしたれ。こゝろまかた
い物来。ことへ金仏になれば
て一分ことぞ。これまでハ言ひし
こゞぎうなりして。ゆざんすと。去
しくとかきくどけい。村うち
うなづいて。懐中笠垂と出して。
拾七八匁んもおいたり。ひいたり
して一緒のわきざしとり。お
墨まであげて。鍋釜に大事
の命をとゞへて。根を切表てゝ。

今三十あとゝいふ。金乃出来を
をとらんとなりに拾つたれを
に親と一所に居れハ兼ち
も自由にハなりけるといひもいそ
ぬに。枝川瓊彦乃引出しから
兼弥乃利刀武丁を出しやり
手乃よしも今日は入てよい
首尾じや。さあ一なりひに殺
さんせし。局乃戸をさし遠ゆ
ろいきなひ。村をぐるくしも
をつめ。それなりに死と拾なり。
男乃身にして。末縁ハさぐかぬ
自然を覚して。金さへとゝなりて

くれば亭をハおれが月をかけて
男まで家来同おの山安さ示
なり所の名ハ天満六丁目と云
枝川眞さわらる魚まで此室
いかり一比ハ毎夜くようか
よりんしらるゆゑとくしハ
さつかあの里へうしまで門よ
りそとへおねて方角をもつ
ぞとこれ不案内ばかりハみぢん
嘘にハあらぞ夜もはぐかゝり
あらして朝めしハ昼迄久めし
ハ夜食になりてぜんしかき
かぎりの事故やりしれ家つゝ

ひかりひゝてぞまつとかしし
まの流れのうきとせばけなり
ぐさゝ夜かあらやら月の出
るやら鳴つ鶴の初云の新
枕のごとくなり所へ亭を舎釈
りない魚つきまで此出此所
ハ一夜泊りの藤者まで二夜と
お宿中なり此法度なれば家
此人物との紙ゆへ了着いて
をあらぞ又日れ泊りれうち。
一日もおき大仏法あへも此出
なきなり合ゆすいてばれい
此縁ぞうく月をかゝねて宿

後とるのを家のこゞめもいつぐ
申れば今日いづくこゝりたゞ
戦あるべしと。稱と拔あして。
急度ちくこゝ代の高まつけも
けて。請れれば。それより三条
小橋に宿とりて。二百公おも
しろうねば。四条河原にさそ
墨。紙墨へもまいらど。麻てぐる
里居るに高き事を聞けて。
なりしあき男女。家うちまいり
ともしんぞ。此ごろ心中をやか
河ぶ。ひらくしらしかりしと。
天象と同じ時にして追出せ。

後拾殘つて武なみ下と。殘
百七拾三文より外。德ひしかる
もなき始末。今にあつて枝
川もしそれて。さそ宴家と
いふ所のちくご座。隠れ家を
き。此ゆうなるもしらず局に
てさけるとしたんぐ。殘家
子にあり。たなつて名を殘
さうものとと。公事枝嬉さあ
て。長町の茶屋やりし。さぞ
うしこまらしめられんと。さんは
明よりの源とあつりとこぼし。
けれに村をこしせきてる魚

こしまじれバ字を盆かきこみ。
善をろくうくして油がみを
ういとい女郎子に家焼うて二
三盃ひけるげにりやうさせ
まやりひのてもとり八限ざりめ
う冥途も今ハ六々銭で八地蔵
葬も不辞身を残さうくとう
け給リぐこれよ六百文地獄うし
極楽への賽銭にハ六貫文極
楽乃上乗上堂が六百文中品が
六貫目下品が二貫目門番と
ねずみへごろうくう孫分六貫目
ういて望人ハ右のごとし親とる

のほりしこよいつ妻の孫ふん
六文銭と路銭とを下されさ
らば家ぞの郷でも老みつり
まへと守りやべし。祈禱兵
親父一族合点せざるゆゑ母親
おろうよ路銀銭よろよぴそう
ま今は二両武士の死出しごろ
くか合仏と云ふてかくし懐へ
てろりといれて往生すろうと
おもへど夜のうちあけよ熱あ
ぐりぴ弥ちもつくづくけ如し
けるが焼て◯のばかとゝめ悪性一
日一夜まての食かんと尿もみて

らどぞ。ぼうへは親もありひきろ
てよせどぞ。さてずむ宿もかけ
まば。京洛中乃門くとあ賣
穂ふりこあさ

三 深井ハ紺乃花畠

雲溪く風輕く日うつり秋乃
夜とハ荒くよの樵ゆ山乃時と始
がほ。口あひよき拄人と友
として。乃灌ふ木を引て
少と望あが筑波ふ峯より落
る渋乃糸。流れぞ意乃測
とありて。首ざけ泳ぐも完整
乃あ。陽りがけ深井ハ立て

里花屋乃紺云来が花燈百
華のさうり。ふ絵の春まぬ
まつたりし。暗くぞれハ義
和掌大般若大白手まり
碎杨妃。されハ猩々金自乗
和志がり。ぐらぬ南陽縣
乃水上ハ遊ぶがどし。舞曲
殘酒ちくで開けば菊乃酒。何
かハ苦しうるべしと。亭主酒
じつまに飲かけしに。日ハ西ふ
まちかく。此蒼乃森杉面白う
つらしに。今ハむかし此紺屋小を
史にそれまゝ乃面かげ。ゆかぬ

白き袷に濃黄ちりめんの志
ごき帯。髪ハ友女のすづらし
ぬごく。籬にちやすくひし比
惟ざれハと貝をさめて見る程
うつくしく。喉掛に菊の花を乳
おされて。桁に朱をかけむるに似
たり。真ゆるにさくやさそ。此英
歌ハどうぞやといへばされハ毎
日夕ぶれどもにハいづくともな
くゆえなふ。然する若りなく。泣
まぢの人かゝ也。花の中を堅摸
に注外して消ぐとく。物ゆ
さるゝ。貞松化物などうそハあり

まいりといへば座中眉毛にわ
をつけ。古語にも梳葉帯の
葉むらに隠るとあまたハ油乃あ
そぐをもれとかをそとへ化生乃
若にしてうらあれかと美しき
ものを只ハ惡れだ。先兆を酒ひ
とつすゝめてのうへにて詢き
おほせたるハ花畠の亭かも。
一夜乃宿とかりまたる。真を
おれハ物の例やまぞハかけを
た尾に気を沈けなへといひ合
せ。持合せたる吸筒花のりと
乃浦じいるも。我忽なぐことなる

へと語じけれども深くも辞退
せどぞかくじけかしと靨を垂
あまり鍋ハ花ちらくがりぐで
そし石焼ハ火と熱じけやく
りなり夜乃音色ニしハ興ハ
入て酒の志ゑて亭をうらう
紛紛しなう酔ごろがくれ
しほづてがほてくしし事
ハいざるひ殺ハ花とかくハ附
事をつけてまとやりて見れ花
尾のやうなり鍋ハ脱てま
やかして焼志ゑろうつゞ
口家体も吹志りまじ見れども

名木とおほえたゞ究なり
源氏業平ありなど兵再
びうたせし伊かとあやしなる
がぞありがたゞ床のうちと
けがたしけなきねへませし
夏夜あけがたすなどろさ
てこれぞありし塗ハ見たを解
挫ろ浅黄の志ごき帯白
き袷いありしまりまてぞ花の
うへハ白筆の花ぞうしうつ
ろひたるやうにて一りとぞそハ
懐て雇しハ此花の異魂がり
ハ形と現じてぞうなき繋り

さめて悔しき愛乃あしりげ
もとゞまりがたく菓木こころ
なきまあらぞさんぞ芭蕉ん
女とあらはれ机ハ夷言と聞し
ころなりぐりろこしの書まうんと
ゝり紙袋ハ高砂乃松の性ハ
(四)京と鄙乃思定
むさしハ衣紋坂といひぞやて
まハ衣紋乃高場と戸かくハ
けるぞもく今の鳴原ぞ脇
乃衣袋ぞ坂の揚屋江戸乃
ゝりなどの新切ハ同とかけど
ゝて一向ハ女郎乃孫とりけ

ゝらこしてざらハ拵若頌
虫乃ふらまひとなさぬ方む
かしまかゝりて大かゝ三体孫
もあまふれぞ一ぬし此世陵
頻伽もゝしゝなきあまりお
もひてぞ敵女郎乃おりて
役ハまきハめぞ楊ハ書のつも
ろがごとくぐらこ書をかゝりて艶
ハ猶ろぞ中比乃東社新西
神楽あふむ茶硝厂今屋も
常住茶乃湯連桃ハおちろ
とませ袴とゝなさぬ乳酒乃
らあら一座とゝ合せて乳をと

舞出せバ広たつが高さ程左の
が程右に来が猿よさまどよ
手紙てざいくらぬ一真
と得しけるが大坂ハ鶴ふりの
ゑよ座と指ぬ戸ハ一座ハ拍子
ゐをもつてゝとゝ俵見ハ秒程
人が縁よまぬぐひと付ながら
令杉子左りよ指て呂今ハ吸
拍ハ出りしたるとあるとあ
れぞおろせ女郎の縁とてて
きおあひ上せかと座指白い
よのさだり俵ほの鞆玄鶴
の魚町とアルハ拍の足ととがと

まだ局よそれまく三体線と
あらさねぞあらぬやうよ油断
せぬハ相のふのお杖お玉が小
屋のおと毎るよ似たり縁ら
けてたゝこの呑ゆげハさせぬ
と鼻紙袋とひつたり男と
れてふせる家よ案てうへか
ら常と解てかぶせるがくら図
の大盃の名所へあらうざと
若ハおりたりこ味線小方
浄瑠璃の下整古せねぞ
傾城ぐるひハあらぬ拍とかうう
ゆげえおたさかく安理酒ゆさ

へろしいはねば聖堂といふ大
曲ろ湖とはじめのは庄が志
まぬと後とてろ。今年波狸
云のせりぬとみて初舎りに
舌すると梓じやといひけるせ
いさ和くの國狸後。不凡皆され
た諸国のいたり詮義は京の
流星と汲で写し縛のいさで
はくらく花の三やこ。今の
沈香丈とはしは桔梗屋丸三五
一文字やの柏木。小ざくらくぎ
里。大坂屋は聖凡言橋。下の
桔梗屋の花さん大橋。柿は

ハ八重ハ八千代斗筒浮ならし。志
げり大磯。貴聖。みらはく和国
むらさめ降てもしらつ
と出口の菓屋はとくづれ池
六平七。菓子丸五。笹仁三重
桂嬢の男だ。すこやか屋の
花に召ゆりて禿がたのもと
ゆひ。櫛の歯と引けこうひ
嵐日正月屋銭の書。絵くめ
の鬱。水上あげづめの花紙
いきまおろせ富屋の下女粉
程人すぐ桐に吹の室といふ
き。日は照るともかなるぬ人間は

あたり、今ハ頭ハ口さ抱ぱけり
ハ○ハ石瓦乃ゑり數十ゑま
同じ。浮世ハ出性入性、利潤
その間ありゑ的乃焼的を
蕊より焼し。菜糀乃ひ
りを用しけるハ閑出爰う
ことを申し中をそうりも
天秤も有帳万く年

江戸四日市
古今珍書僧
遠隆橋近一

宝永五年
閏正月吉

スユ